

キリスト者⁽¹⁾を生きる

—ある在日コリアンの人生の軌跡と信仰の意味—

Living as a Christian

— The Life Journey and Faith of a Zainichi Korean —

李 賢京

LEE HYUNKYUNG

Abstract

This paper focuses on the life history of Mr. Han Deok, who introduces himself as a “half-hearted Zainichi Korean.” It aims to elucidate how his experiences of “living as a Zainichi Korean” and “living as a Christian” intersect in the context of his relationships with others and how these intersections have shaped his self-awareness. In particular, the study traces his journey to “living as a Christian,” highlighting the process through which he finds liberation from the oppressive identity of being a Zainichi Korean—a people neither fully Japanese nor fully Korean—and portrays him as an individual living through faith. The goal of this paper is to shed light on his transformation into a human being defined by faith.

Key-words: Zainichi Korean, Christian, Identity, Ethnicity, Positionality

はじめに

日本社会における在日コリアンの信仰、とりわけキリスト教については、教会という組織や宗教者に焦点を当てた研究が多く見られる（荻2024）。しかし、信者個人に焦点を当てた研究は依然として不足している。そこで本稿では、在日コリアンのカトリック信者における信仰の意味を明らかにすることを目的とする。

筆者が初めて在日コリアン⁽²⁾のカトリック信者と出会ったのは2008年のことである。当時、北海道大学大学院に在籍していた筆者は、カトリック東室蘭教会の故・李正雨（イ・ジョンウ）氏と出会った。この頃、筆者は共同研究者とともに在日コリアンを対象とした調査を行っており、その中で朝鮮学校の教員やカトリック信者と接触する機会を得た。李正雨氏には数度にわたり面会し、彼女の人生の歩みとその中で信仰の意味について聞き取りを行った。当時、彼女も自身の信仰の歩みを文章として残すことを望んでいたが、なかなか機会を設けることができず、時が過ぎてしまった。それを果たすことなく、彼女はコロナ禍の最中に亡くなった。彼女は生前、自叙伝『ムクゲの頬づえ』（2014年）を出版しており、その人生の軌跡は記

録として残されているが、その中に信仰生活についての具体的な言及は残念ながら含まれていない。

その後、筆者はカトリック教会と外国人信者との関わりについての調査を開始し、2019年には函館のカトリック教会を基盤に技能実習生を支援する活動を行っている韓徳（ハン・トク）氏と彼が運営するSNSを通じて知り合った。それ以降、筆者は韓徳氏への調査を継続している。調査活動を進める中で、筆者は彼の外国籍信者への積極的な支援活動に共感し、彼が関わる青年会の活動にも一部参加するようになった。その過程で、韓徳氏がかつて日本名を使用していたが、ある出来事を契機に民族名に戻すことを決意したという「語り」を聞く機会を得た。この選択に込められたエスニック・アイデンティティや宗教的アイデンティティ、つまり信仰の意味づけに筆者は強い関心を抱き、今度こそ在日コリアンのカトリック信者としての人生を記録として残すべきだと考えるようになった。以降、筆者は韓徳氏本人のみならず、彼の活動に影響を与えた周囲の人物——例えば、外国人 인권運動に携わった在日の女性信者や日本人カトリック司祭——にも聞き取り調査を行い、彼の人生の歩みと信仰生活について多角的に捉える試みを進めることにした。

本稿では、「中途半端な在日韓国人です」と自己紹介する2.5世の在日コリアンのカトリック信者である韓徳氏の生活史に焦点を当てる。

表 韓徳氏の人生の軌跡

| 時期 | 主な出来事 |
|-------|--|
| 1976年 | 東京・浅草で父・韓（当時47歳）、母・朴（当時37歳、洗礼名はジェンマ・ガルガーニ）の一人息子として生まれる。その後、世田谷に引っ越す。母親と共にカトリック赤堤教会に通うが、カトリック鹿島田教会で幼児洗礼を受ける（洗礼名はヨハネ・ボスコ）。 |
| 1986年 | 小5の時、韓国釜山をはじめて訪問。親戚と言葉が通じず違和感を覚え、それがトラウマとなる経験となり、高校卒業まで韓国には行かなかった。 |
| 1988年 | 世田谷区立八幡山小学校を卒業 |
| 1988年 | 中1にカトリックカトリック関口教会にて合同堅信を受ける |
| 1991年 | 世田谷区立緑丘中学校を卒業 |
| 1994年 | 東京農業大学第一高等学校を卒業 |
| 1995年 | 1年間の浪人を経て英知大学文学部神学科（兵庫県尼崎市） ⁽³⁾ に入学 |
| 1999年 | 英知大学文学部神学科を卒業、フランシスコ会に入会 ～2000年 フランシスコ会桐生修道院 志願期 ～2001年 フランシスコ会三軒茶屋修道院 志願期 ～2002年 フランシスコ会北浦和修道院 修練期 |
| 2002年 | 聖アントニオ神学院（フランシスコ会）に入学 日韓ワールドカップサッカーの年に、「西原」から「韓」に名前を変える |

| | |
|-------|--|
| 2003年 | 神学予科 2年目に、南アフリカに1年間派遣（～2004年） |
| 2006年 | フランシスコ会を退会。その後、10か月程度、フランシスコ会の老人ホームで仕事や、ハローワーク、求職活動、IT関係の資格を複数取得し、幼い時から面倒をみてくれていた同じ教会の信者の会社で手伝いをしていたが、会社がすぐに倒産 |
| 2007年 | 結婚 |
| 2008年 | 東京都江東区のIT会社に勤務（～2011年） |
| 2011年 | 函館ラ・サール中学校・高等学校の教員として勤め始める |
| 2012年 | 娘が生まれる |
| 2016年 | フィリピンボランティアを始める |
| 2018年 | カトリック函館地区青年交流会のリーダーを務めながら、外国人技能実習生などの支援活動に取り組む |
| 2023年 | タイボランティアを始める |
| 2023年 | 7か国（フィリピン・シンガポール・マレーシア・タイ・ミャンマー・香港・日本）で構成しているラ・サール会東アジア管区（LEAD — Lasallian East Asia District）宣教評議委員の日本代表を務める |

韓徳氏の生活史から、「在日コリアンとして生きる」という経験と「キリスト者として生きる」という経験が、他者との関係においてどのように交錯し、その中で彼自身が自己認識をどのように形成してきたのかを明らかにすることが目的である。特に、彼が「キリスト者として生きる」までの過程を追い、その過程で抑圧的な「民族」——日本人でもなく韓国人でもない在日コリアン——という存在から解放され、信仰を通じて生きる一人の人間としての姿を描き出すことを本稿の最終的な目標とする。

1. 在日コリアンの生活史とエスニシティ研究

在日コリアンの生活史に焦点を当てた研究は数多く存在する。たとえば、小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』（2008年）は、民族団体の活動家、文学者、ハンゲルソフトの開発者、サハリンからの引き揚げ者、被爆者、歴史学者、音楽家、画家、海女、焼肉店経営者、教会関係者など、52名の在日一世の体験談をもとに、東アジアの狭間で力強く生き抜いた人生の軌跡を記録している。小熊英二・高賛侑・高秀美編『在日二世の記憶』（2016年）では、哲学者、実業家、医師、社会運動家、ミュージシャン、僧侶、伝統工芸職人、格闘家、劇団員、マジシャン、映画関係者など、「二世」たちの生活史に焦点を当て、「一世」を超える劇的な運命や、アイデンティティをめぐる困難な問いに翻弄される姿を描き出している。

こうした生活史の記録は、在日コリアンのアイデンティティ研究にも重要な視点を提供してきた。具体的には、民族教育や民族運動に携わった者、あるいはそれに関わらなかった者（金

2008)、民族本質主義を批判し、民族の脱構築を志向した者(金1999、鄭2003)、さらに「朝鮮籍者」「ダブル」「日本籍者」といった在日社会内部で周縁化されてきた者(李2016)に至るまで、その多様な生き様を通じて、以下のような問題が明らかにされている。すなわち、一世が日本社会で受けた「抑圧・排除」、二世たちの「流動的で多様化」するアイデンティティの形成過程、さらには「ダブル」や「帰化」した者への在日社会内部での排除といった、アイデンティティ・ポリティクスの諸相である(薛2024)。

しかしながら、従来のエスニック共同体の結びつきが希薄化する中、既存の排除や同化、あるいは流動的なカテゴリーにも収まらない新たな在日の姿も浮かび上がっている。川端(2013)は、家族や親戚以外の在日との関係性を持たず、孤立した環境で生活する人々を「隠れ在日」と定義し、「既存の民族団体が掲げる一枚岩のエスニック・アイデンティティにも、自らのエスニシティを力強く主張することにも、どこかためらいを感じる存在」と位置づけた(川端2013:198)。これらの人々は、日本生まれ日本育ちであるがゆえに、民族を実感する経験が乏しく、「経験のない民族を生きる」(井上2016)存在である。彼らは在日コリアンとして生きようとしたとき、準拠すべき「あるべき在日の姿」が希薄である中、日常生活における多様な経験を、自らのアイデンティティとして解釈し、意味づけている(井上2016:204)。

2000年代における韓流ブームの到来、2002年の日韓共同開催のワールドカップによってポジティブな情報が日本社会に流入するようになった一方で、北朝鮮による日本人拉致問題の発覚を契機としたバッシング、さらには市民団体によるヘイトスピーチや嫌韓本の出版などネガティブな言説もみられ、2000年代以降、韓国にかかわるさまざまな情報が生産・消費されている(井上2016)。このような状況下で、差別や排除が根強く残る一方で、韓流ブーム以降、韓国というルーツを能動のかつポジティブに捉えようとする在日の存在も増加したと考えられる。本稿の韓徳氏もその一人であり、民族的／宗教的アイデンティティを再解釈し、意味づけながら生きる姿を示している。

このように、在日コリアンの生活史は「ときには国家や民族に足を引っ張られ、ときには頼り、また突き放しながら、ローカル／ナショナル／グローバルの狭間で、自らについて語るための言葉を紡ぎ出している」(李洪章2024:44)。本稿では、その多様性に着目しつつ、韓徳氏的生活史を通して、エスニック・アイデンティティや宗教的アイデンティティがどのように解釈され、意味づけられるかを考察する。

2. 在日コリアンの信仰とアイデンティティ

在日コリアンにおいて、宗教的アイデンティティがどのように形成されていったのかを考察するにあたり、鈴木隆男の遠藤周作に関する分析が示唆に富む。鈴木は、遠藤の受洗と創作活動を事例に、信仰の内面化の過程を次のように論じた(鈴木2015)。

遠藤周作は、母のための受洗という自分の選択を、「母親が買ってきてくれた洋服を、そのまま着せられた」のだが、「その洋服は、私の体の寸法に合わず、あるところ

は長く、あるところはダブダブで、またあるところは短かった」と表現し、強い違和感があったことを物語っている。このような無自覚な選択の結果に対して非常に苦しんだようであり、一時期はこの洋服を脱ぎ捨てることさえ考えた。しかしこの洋服をくれた母への愛着から、結局脱ぎ捨てることはできなかった。さらに彼はのちになってこの服を脱ぐことは考えず、かえってそれを自分に合う和服に仕立て直すことで生きていくことを決意した。大学でフランス文学を専攻し、さらに戦後最初のフランスへの留学生として経験した、キリスト教文化と自分の中にある汎神論的な心性の相克の中から、彼はカトリック文学を通して自分が着せられた洋服の仕立て直しの作業に取り組んだといえるだろう。子どものころにも、洗礼を受けるという行為が何を意味するかについて、多少の理解はあったであろうと考えられるが、先に述べたようにカトリックとプロテスタントを合わせても、総人口の0.5%にも満たないキリスト教徒の人口を考えたとき、遠藤周作のカトリック文学者としての創作活動は、青年期的な生き方の選択という意味を持ち、自分のアイデンティティを求め続けたといえるであろう。

このような遠藤の経験は、日本社会において少数派であるキリスト教徒の信仰者としてのアイデンティティ形成の難しさを物語っている。特に、二世信者においては、親世代から継承された宗教的アイデンティティが形式的・慣習的なものにとどまる場合、自己の主体性を十分に発揮できないリスクがある。この点について鈴木（1990）は、「信仰がアイデンティティ形成に寄与するのは、それが深く内面化された場合のみであり、形式的・慣習的な信仰は無信仰と何ら変わりがない」と指摘している。さらに、信仰の内面化において重要な要素として、同じ信仰を共有する共同体との協働性が挙げられる。信仰者が宗教共同体を通じて自己を統合し、他者とのつながりを築く過程で、信仰に基づくアイデンティティはより強固なものとなる。

では、在日コリアンという少数派であり、同時にキリスト教信者という少数派でもある韓徳氏の生活史をどのように解釈すべきであろうか。彼の宗教的アイデンティティ形成は、個人の信仰の枠を超え、エスニシティや共同体との関係性の中で解釈できると考える。

在日コリアンにおける宗教とアイデンティティの関係性については、これまで文化人類学や社会学の分野で多くの議論がなされてきた（宮下2020）。例えば、祖先祭祀や墓を通じて民族文化の継承とアイデンティティ形成を明らかにした研究（李1996）、大阪市生野区の在日社会における民俗宗教、チェサ（儒教的祖先祭祀）、仏教、キリスト教が果たす役割を分析した研究（飯田2002）などがある。また、ニューカマーの韓国人宗教者に関する研究（宮下2012）は、彼らが日韓を往復するトランスナショナルな生活スタイルの中で主体性やアイデンティティを形成していることを論じている。これらの研究から明らかなのは、宗教が単なる信仰の枠を超え、在日コリアンのエスニシティ形成において重要な役割を果たしている点である。宗教的信仰を基盤とした共同体の中で、在日コリアンは日本社会の中で能動的かつ主体的に生き抜く力を得ている。

韓徳氏もまた、自らのルーツに関する明確な意識を持つ以前から、カトリック信仰を通じて自らのアイデンティティを形成してきた。彼の宗教的アイデンティティは、エスニシティに基

づく葛藤を超越し、主体的な自己の構築へとつながっている。また、カトリック信仰が彼にとって「国家や民族といった枠組みを超えた自己の創造」を可能にするものである点も注目すべきである。

千田（2005）が指摘するように、人間のポジショナリティは、文脈や他者との関係によって常に変動し、多元的かつ相対的である。本稿の語り手である韓徳氏の生活史からは、「他者との関係で自らがどのような者として立ち現れるのか」というポジショナリティの動態を読み取ることができる。彼の宗教的アイデンティティ形成は、単なる個人の内的経験にとどまらず、他者からの承認や排除といった社会的相互作用を通じて形成されている。

カトリック信仰を通じて、韓徳氏は「複数のアイデンティティを持ちながら生きる」ことを選択している。彼が在日コリアンとして、日本社会の中で宗教的少数派として生きる姿は、信仰がいかにアイデンティティ形成に寄与するかを示す重要な事例である。本稿では、このような宗教的アイデンティティがどのように日常生活の中で形成され、意味づけられていくかを韓徳氏の生活史を通して検討する。

3. 韓徳氏の生活史

(1) 生まれと幼少時代

韓徳氏は1976年3月4日、東京都浅草にて、父・韓（当時47歳）と母・朴（当時37歳）の一人息子として誕生した。生後間もなく一家は世田谷区の都営住宅に転居し、三人家族で生活を始めた。この家庭では「西原」という通称名（日本名）が使用されており、在日の友人や知人との関係はほとんどなかった。

韓徳氏の父親は1929年、釜山にて三人兄弟の次男として生まれた。幼少期、祖父母の一家は生計のため大阪に移住したとされるが、その具体的な経緯については明らかではない。父方の祖父は済州島の出身で、本籍も済州島にあるものの、済州島の親戚との交流は一切ない。父親の兄は事故で亡くなり、韓徳氏にとっては面識のない存在である。一方、父の弟は釜山に在住しており三人の娘を持つ。韓徳氏は小学5年生の際、この叔父家族と再会を果たしている。

父親は東京と大阪でそれぞれ異なる職に就いていたが、後に視力を悪化させ、在宅で鍼灸を生業とするようになった。韓徳氏は父親について「父とは深い話はしてなかったが、母がうるさいほうだったので、時々内緒で二人で旅行に行くとか、自由奔放で、子供からみてうらやましい感じの父だった」と振り返る。しかし父親は「無理をして仕事をしていたから、病気のデパート」と病気がちであり、韓徳氏が高校2年生（1992年）の時に病で亡くなった。

母親は1939年、木浦（モクポ）にて三人兄妹の末娘として生まれた。彼女は木浦で看護師を務め、カトリックの洗礼を受けた（洗礼名：ジェンマ・ガルガーニ）⁽⁴⁾。母親が父親を紹介されたのは、友人の仲介によるもので、結婚を機に来日した。来日後、母親は日本の病院で給食業務を担い、修道院の手伝いも行いながら家計を支えた。母親の姉は既に他界しているが、その娘は日本で旅行代理店を営んでおり、母親の親族とのつながりは浅いものの、韓徳氏が幼少期に木浦を訪れた際には、母の姉の家に宿泊したという。母親は父方の家族との交際を避ける

傾向があり、韓徳氏はその理由を「母親は父親とステータスが違うので、父との家族との付き合いを嫌がっていたことがその理由かもしれない」と推測している。

韓徳氏は小学5年生の時、初めて父親の故郷である釜山を訪問した。しかし、そこで親族と会話が通じず、通訳が必要な状況に直面したことで、「家族であると言われても言葉が通じない」ことに強い違和感を覚え、「トラウマ」になったと語っている。

親戚たちと言葉が通じず、通訳が入ってました。家族って言われているのに言葉が通じない。それから（その出会いが）トラウマになり、行きたくないなど。で、毎年韓国には行ってたんですけど、釜山の方へは行かないで、いつもほとんど木浦の母親の田舎の方へばかり行ってました。そこでも親戚とは言葉が通じなかったんです。木浦の方は貧しい感じ、釜山の方はお金持の感じ。だけど、自分の親戚は父親の方なのに、なぜいつも母親の方ばかり行ってるのかなって、心の中で思っていました。

この違和感は、「西原」という通称名の使用や、家庭内での会話が日本語中心であったこと、在日コリアンコミュニティとの関わりが希薄だったことに起因している可能性がある。韓徳氏は日本の公立小中学校、そして私立高校に通学していたが、学校生活でも通称名「西原徳」を使用しており、在日の友人は「僕の中では一人もいなかった気がします。実際はどうなのでしょう。周りにいなかったから意識しなかったかもしれない。」と振り返る。ただし、父親を通じて知り合った在日家族（平間家、高原家、新井家の三家族）との正月の集まりは、年に一度の恒例行事として続いており、韓徳氏はこの三家族を親戚のように感じていたという。それ以外の在日コミュニティとの接点は乏しく、「差別の経験」もほとんどなかったという。だが、小学45年生頃に、友だちの家で食事をした時に「あれ？（料理や食事マナーなど）違うなって。何で違うんだらうって。周りの人はうすうす知ってたでしょう、言わないだけで。」と違和感があつたと振り返った。

韓徳氏の居場所となったのがカトリック教会であった。母親は結婚前に韓国で洗礼を受け、来日後はカトリック赤堤教会（東京都世田谷区）に通っていた。父親はカトリック信仰を持たなかったが、亡くなる前に自宅にて「病者の塗油の秘跡」を受け、カトリックの教えに基づき旅立った。韓徳氏自身は幼少期にカトリック鹿島田教会（神奈川県川崎市）で洗礼を受けた（洗礼名：ヨハネ・ボスコ）。これは「おそらくその時、母は日本語に問題があったのではないかと思います。だから、鹿島田で日本語を話すことができる平間さんのところで受洗させたのではないかと思います。」にみるように、母親が日本語での意思疎通に不安を感じ、平間家の助けを借りたためだと考えられる。平間家は上述の在日三家族の一つであり、在日外国人労働者の問題に取り組んだ人で、後に韓徳氏の信仰生活および技能実習生などへの支援活動に多大な影響を与えた存在であった。

小学生時代、韓徳氏は教会学校に通い、中学1年生の際にはカトリック関口教会（東京司教座聖堂、東京都文京区）において合同堅信を受けた。その後の中高時代には、部活動のない日曜日にミサへ出席していた。韓徳氏は当時の教会や信仰について振り返り、「今とは違って、

若い人たちが平日でも教会にはいたので、小学生時代は一番楽しかったですよ。中高は部活の関係であまり行けなかったですが。人間とつながっていることでしょうか、その時は神というよりは人間」と語り、教会が自分にとって重要な居場所であったことを明らかにしている。韓徳氏は、自らのルーツに向き合う以前から、自然に宗教的アイデンティティを獲得し、その中で深い結びつきを感じていたと考えられる。そして後年、信仰をさらに深めた韓徳氏は、教会を「家のような場所」として位置づけるようになった。その心情を表すように、「カトリックなくなったら死んでますんで。家のような感じです。心が落ち着くところです。」と述べている。韓徳氏にとって教会は単なる宗教的空間にとどまらず、精神的な支えとなる拠り所であったと言える。また、在日の友人や親族との関係が乏しい環境に身を置いていた韓徳氏にとって、教会はその代替としての役割も果たしていたと推察される。こうした背景から、宗教が単なる信仰の枠を超えて、韓徳氏の人生において重要なコミュニティの基盤となっていたことが見て取れる。

(2) 神学部入学から修道会入会まで

高校卒業後、1年間浪人生活を送り、1995年に実家のある東京を離れ、兵庫県にある英知大学文学部神学科に進学した。この選択の背景には、自身の将来に対する漠然とした不安があったという。当時、彼の親戚（前述の父親を通じて知り合った在日の三家族）は焼肉店やパチンコ店を営んでおり、自身もその道を辿ることになるのではないかという感覚があり、苦悩していた。

将来はそんなに明るくないってことは分かっていました。その当時も、私の日本にいる親戚のほとんどは、焼き肉屋かパチンコ屋をやってまして。だから自分にもそういう道しかないのかなど。高校の時も感じていました。だから、弁護士か医者じゃなければ、パチンコ屋か焼き肉屋という。すごい狭いんだなと。高校卒業後、1年浪人しているけど、その時は先が見えなくて、どうしようかなとずっと考えている感じ。一般大学への進学は考えていなかった。道が狭かったんで。だからできるのはどこかなって考えて、宗教的なものに行こうかと思って、神学へ。浪人の時に決めた。周りは結構普通にね、東京農大（母校）に入ってる生徒もいるなかで、なんか自分はどこに行くのかなと、ずっと悩んでましたね。人に今できないことをやろうかと思って、いまあまり関心がなくて、いまあまり人が手を付けないところへ行こうと思って神学へ。

浪人生活を送る中で、周囲の友人たちが母校の東京農業大学などに進学していく姿を目の当たりにしながら、自身の進むべき道を模索し続けた。そして、他人があまり関心を寄せない分野や未踏の領域に挑戦しようという思いから、神学を選択するに至った。その背景には、自身のエスニシティや出自に縛られた状況から解放されたいという漠然とした願望が垣間見える。彼は、「大阪の神学科に行ったのは、なんだろうね、ちょっと自分のいまの東京から離れたかったです。生まれ育った環境から離れて、衣食住とかも全部含めて自分でやる生活、やったこ

とないので、離れてみる。大阪には親戚誰もいなかったけど。」にみるように、自らの生まれ育った環境から物理的に距離を置くことで、新しい生活をスタートさせることを決意したのである。もちろん、その際の神学という選択は、幼い頃からのカトリック信仰を内面化してきたことも大いに貢献していると思われる。しかしながら、こうした新生活の中で、自身のアイデンティティと向き合うことに関しては依然として消極的であった。彼は大学生活を通じて日本名を使い続け、「自分のアイデンティティよりは、今生きているのが精いっぱい」だったと述べている。将来への漠然とした不安が先行し、自らのエスニシティについて考えることを避ける傾向にあった。その理由として、「(環境を) 見ちゃうと未来があんまり見えないから」という恐怖感を挙げている。

ずっと、大阪でも日本名を使ってたので。アイデンティティは、大学の時に、おなじ日韓国人がいんだんですよ。その人は普通に自分の名前を使ってたので、それが影響したかどうかはわかりませんが。まーその時もあまり考えてなかったんですね。自分の将来が見えない、とりあえずのりくらしという感じ。自分のアイデンティティよりは、今生きているのが精いっぱいという。そちらの方が先行しているんじゃないかな。アイデンティティなどは、考えないようにしてたと思う。考えないようにする。見ちゃうと未来があんまり見えないから。周り見てると自分の置かれている環境が。あまり考えないほうが楽です。教員もなれないでしょうし。だから、本当に教員になろうと僕の中でなかったです。

しかし、大学3年生の頃、大きな転機が訪れる。近隣にあったカトリック生野教会（大阪府大阪市生野区）とカトリック箕面教会（大阪府箕面市）を通じて、フランシスコ会の司祭や修道士たちと出会い、大阪・釜ヶ崎での日雇い労働者支援活動に参加する機会を得た。この経験を通じて、「修道者としての生き方」への憧れが芽生えたと語る。その背景には、多国籍な修道者たちとの交流と、日雇い労働者支援活動への彼らの生き方がアイデンティティから解放されたものとして魅力的に映ったことが大きいとされる。

進路についてあまり考えないようにしてたんですが、ちょうど大学3年生くらいの時に、近くに生野教会と箕面教会というところがあって、そこがフランシスコ会の教会だったんです。そこからかな。そこで神父様とか修道士とかに出会って、釜ヶ崎とかいろんな活動に参加させてもらったときに、あーこういう修道者としての生き方がいいなって。あまり自分のアイデンティティとか考えずに生きる生き方に憧れを少し持って。ワールドワイドな感じで。そこがすごく美しく見えたかな。ドイツ人と、韓国人、あとはアメリカ人、日本人の修道者との出会いがあったんですけど、いろんな国籍の人たちがいたから、自由に見えたというか、アイデンティティ云々から解放されているように感じました。

大学3年生の終わり頃には修道会への入会を決意し、4年生に進級するタイミングで生野教会の修道院に居を移して生野修道院から1年間通学した。母親からは「一人っ子だから普通に結婚してほしい」と反対されたが、その声を押し切り、1999年にフランシスコ会へ入会した。入会后、志願期を過ごす中で、フランシスコ会の神父たちが平間正子氏の活動にかかわっていたことから、在日外国人労働者支援に尽力した彼女の活動を知ることになる。平間氏は彼が親戚のように慕っていた人物であり、その活動を通じて彼の意識に大きな影響を与えた。在日としての自分にきちんと向き合うようになったのである。

マリア・オンマこと平間正子氏⁽⁵⁾は、1937年済州道生まれで、1962年に来日し、1989年、鹿島田教会の上原功宏神父⁽⁶⁾とともに、韓国スミダ電機の労使紛争⁽⁷⁾が起こった際に労組団の通訳を務めるだけでなく、陰から精神的に支える「お母さん (=オンマ)」役として関わった(齊藤1994)。この争議から社会運動へ足を踏み入れた彼女は、その後、在日外国人問題に取り組む「コミュニティ・神奈川シティユニオン」で活動をはじめ、横浜・港町診療所のスタッフとともに外国人労働者の医療面でのサポートを目的とした「みなとまち健康互助会」を発足の上、活動し、互助会の代表として「第二回田尻賞」を受賞した。平間正子氏は以上の社会活動の中で「国籍に関係なく人間としての平等を尊重する」という理念を掲げていた。

人間、生きている者はみんな同じ。大事なものは心です。在日外国人労働者、とくに韓国人の問題に首を突っ込んでいるのは、私が韓国出身で同胞だからって、支援しているんじゃない。国籍なんか関係ないんですよ。生きていく上で最低限の保障もなく、苦しんでいる人たちがいる。人間同士として平等に、この日本社会の中で暮らしていくために、いまやらなくちゃならないことがあるからなんです(齊藤1994: 11)。

彼女の影響を受けた韓徳氏は、フランシスコ会の修道士たちや鹿島田教会の上原功宏神父との出会いを通じて、外国人労働者支援や人権問題への意識を次第に深めていった。このようにして、彼の活動は「平間おばさんや周囲からの影響が大きいですね」と自ら語るように、宗教者としての使命感と在日としての自覚が交錯する中で深化していったのである。

(3) 名前を変え、そして修道会を退会

1999年に英知大学文学部神学科を卒業した後、2000年までの1年間を群馬県桐生市のフランシスコ会修道院で過ごし、続く1年間を東京・三軒茶屋の修道院、さらに2002年3月まで北浦和の修道院で修練期を送った。2002年4月、フランシスコ会日本管区が運営する聖アントニオ神学院(東京都世田谷区)に入学し、哲学予科で学んだ。

そのような中、韓徳氏が自身のルーツに本格的に向き合い始めたのは、2002年の神学院での夏休み課題計画を契機としている。修道会入会后、親戚と思っていた平間氏が外国人支援活動家として活躍していることを知り、自身の出自に目を向ける決意をした可能性がある。実際、修道生活の中で「西原」という名前を名乗っていた彼が、現在の「韓」に改名したのも2002年のことである。それまで「西原」という名前について深く考えたことはなかったが、母親から

は本名を避けるよう求められていたこともあり、その名前を維持していた。しかし、次第に自身の名前の由来やその背景を探りたいという思いが芽生え、自分で納得した上で改名すべきかを真剣に考えるようになったという。その過程で、平間正子氏に相談したところ、「お前は自分のルーツも何も知らない」と言われたことが大きな契機となった。この言葉が、自らの過去やルーツと向き合うきっかけとなったのである。

なんだろう。実は、修道会に入ったときも、ずっと西原という名前だったですねもとの。ずっと西原という名前で修道生活をしてたんですけど、2002年に自分の今の名前の韓にしたんです。それまでは西原という名前にそんなに深い意味があるとは。まーうちの母親からは変えないようにと言われていたから、ずっとそれを固持していたけど。ちょっと自分でちゃんと自分の名前とか、なぜこの名前になってるのかとか、そういうことを調べて、自分で納得した状態で、西原をつけるか、元に戻すのかを考えたかったので。それが2002年かな、ちゃんとみた感じです。母じゃなく、正子さんに聞いたのは、母は聞いても全然話してくれなかったから。あまり深い話はしてくれなかったです。うちの母親は日本語の問題もありましたし。それで、ちょうど、毎年夏に1か月くらい夏休みがあるので、神学生のときに、1か月をどのように過ごすのか計画書を出すんですね。1年目は全然違うことやってましたけど、2年目は自分自身のアイデンティティについて調べる1か月にしたいと思って「韓国のルーツを探す旅」プログラムを自分で作って出したんです。そこから川崎（桜本）のプログラムで韓国の富川と川崎が姉妹都市なので、その関係でハルモニ（おばあさん）、ハラボジ（おじいさん）に会いに行こうみたいなツアーの中に組み込んでもらったんです。そこから始まったんです。きっかけは、うちの叔母の正子さんに、ちょうどワールドカップというのもあったし、僕のルーツってどこになるんですかとか、アイデンティティとかいまちょっと調べようと思ってるんだけど、どう？意見ありますか？とか言ったら、「お前は自分のルーツも何も知らない」と言われてから、考え始めた。「何も知らないだよ」と言われて、それからかな。それからなんかあまり見たくない自分の昔を振り返ってみようと。

このプログラムの一環として、川崎市桜本地区の在日高齢者たちとともに韓国・仁川や富川を訪問したが、この「ルーツを探す旅」では明確な答えを見出すことができず、混乱を抱えたまま帰国する結果となった。それでも帰国後すぐに「西原徳」から「韓徳」へ改名した。この決断について、「とりあえず、変えてみよう。変えてみないと見えてくるものがわからないのではないか」という思いがあったと振り返っている。

以降、フランシスコ会の初期養成プログラムのために、韓徳氏はその準備として韓国語を学びながら、再び自身のエスニシティに向き合おうと考え始めたところ、2004年に南アフリカ共和国への派遣が決まり、2005年2月までの約1年間を同地で過ごすこととなる。ヨハネスブルグ近郊のボックスバーグでは HIV 患者のためのホスピスで活動し、さらに300km 離れたベスタス地区では修練院で修練者の世話役を務めながらホームステイも経験した。この地で出会った

フランシスコ会の神父たちとの交流が、彼にとって大きな転機となる。彼らから「私が好きなのは、在日コリアンでも、韓国人でも、日本人でもない、韓だから、あなただから」と語られたことが、韓徳氏にとってアイデンティティの受容を深める重要な一言となった。

2002年に自分のルーツをたどる旅の中でぼんやりと意識し始め、2004年の南アフリカの時に開かれた。外側（ハルモニたちに出会っていく）から無理に意識を向け、南アフリカで内側（自分自身の中で）が開かれていく、感じです。

この出来事から、彼は従来の「民族」というカテゴリーにとらわれることなく、自己肯定のプロセスを進めてきた。そして、キリスト者として生きる中で、「いかなる者であっても存在してよい」という認識に至る契機を得たのである。日本社会で韓国への関心が高まり、エスニック・アイデンティティへの自覚が芽生えた2002年と、その後南アフリカでの経験を通じて内面的な変化を遂げた2004年を経て、韓徳氏は「カトリック信仰に生きる」という生き方を確立したのである。

ところが、2005年に帰国後、神学本科での学びを続けたものの、南アフリカでの経験以降、教会内での息苦しさをを感じるようになった。「自分の息苦しさというか、なんかどんどん祭り上げられていくのがすごくいやで、自分と合っていない感じ。神父になっていくと、どんどん上に上がって、見えない精神的なものがずっと増えていって。なんかフラストレーションがずっとたまっていくような。（中略）本音が言えず、自由に発言できない」という状況に苦痛を覚え、莊巖（終生）誓願を控えた2006年3月、修道会退会を決断するに至った。この決断は、エスニック・アイデンティティの覚醒と引き換えに、宗教的なアイデンティティにおいて新たな葛藤を抱える結果ともなった。

(4) IT企業の社員からラ・サールの教員へ

修道会を退会后、具体的な職業の展望がなく、新宿にある「マリアの宣教師フランシスコ修道会」の老人ホームで働く傍らアルバイトで生計を立てていた。2007年からはハローワークで求職活動を行い、複数のIT関連資格を取得。その後、幼少期から面倒を見てくれていた教会の信者（日本人）が経営する会社で仕事を手伝うことになったが、ほどなくしてその会社は倒産してしまった。このような不安定な状況下においても、韓徳氏を支え続けたのはカトリック信仰と妻の存在だった。

同年、1970年生まれ日本人女性と結婚。妻もカトリック信仰を持ち、幼児洗礼を受けていた。同じ信仰を共有し共にいることで「心が落ち着く」と感じ、結婚を決意したという。二人の関係は、修道院時代に何度かメールで相談をした程度であり、特に親しい交友があったわけではなかった。

2008年3月から2011年3月まで、取得したIT関連資格を活かし、東京・江東区のIT企業で勤務。最初はアルバイトだったが、後に正社員へと昇進し、次第に生活も安定していった。そのような中、偶然カトリック教職員募集サイトで函館ラ・サール中学・高等学校の教員募集を知

る。これまで学んできた宗教の知識を活かしたいという思いが突然芽生え、応募を考えるようになった。

フランシスコ会の先輩から「35歳が最後の転職のチャンスだから」と言われて、もし1年以内に転職するチャンスがあるんだったらどこに行きたいのかなって自分で多分考えたんでしょね。当時通っていた会社は好きでしたよ。退職するときみんな集まってくれて、また会おうねって。彼らにはいまでも会ってますよ。だけど、これで一生涯過ごしていける自信があるのか、多分自分に声がかかったような感じがしたんです。それで、ふとカトリック求人サイトというのがあったから、なんかやってみたかったのかなって。教員の免許（宗教科1種）も持ってたし。大学の時に、なんかの保険になるから取っておくようにとシスターが私に言ったので、なんかの保険になるかなと思って取ってたんです。それが役に立つときがあるのかなって。今まで持っている資格の中で使えて自分がやってみたいなって思う資格はどれだってなったら宗教科になって、それで挑戦。最後のチャンスをちょっと一回お試し？まあ、無理だと思うけど、試していいですかって、奥さんとフランシスコ会に質問したら、「いいんじゃない夢を追っかけるのはタダだから」って。「どうせ採用されないからいいでしょう」って言われて。

挑戦するだけなら無駄にはならないと考え、応募を決意。一次試験、二次面接を突破し、見事採用が決定した。しかし、その後も「いままでせっかくIT会社で基盤つくって一生懸命ちゃんともな給料もらって生活してるのに、なんでそれをすべて捨てて行くんだ」「それだけの価値があるのか？」「契約が切られたらどうするんだ、家族はどうするんだ」といった母親や妻の家族、フランシスコ会先輩たちの反発に直面した。それでも、修道院時代にお世話になったシスターたちの「行って楽しんでみたら」という言葉に背中を押され、教職への転身を決意した。

こうして2011年4月、函館ラ・サール中学・高等学校の教員として新たな一步を踏み出した。同年3月11日に発生した東日本大震災の影響で引越しの荷物が届かず、ほぼ何もない状態で教員生活をスタートすることになった。「やっぱりやめろってことかなと、神様からの試練かなと思って。まさか自分が採用されるとは思ってなかったし」と感じることもあったという。初めての教職で不安は尽きなかったが、宗教科の教員免許を活かすことで「一生涯過ごしていける自信が持てる道を選んだ」と語る。

教員生活を開始してから、2年間の契約を経てその後1年ごとに契約が更新され、最終的には7年間の任期を経て無期雇用へと移行した。現在は「倫理宗教（宗教）」と「社会科:倫理」を担当し、サークル「ミッション部」の顧問を務めている。2012年1月1日には娘が誕生。自らの進路において自身の経験から「在日コリアンとして進めなかった教員の道」を切り開き、宗教を通じて「一生涯過ごしていける自信のある道」を果敢に模索しているのである。

(5) 「青年交流会」活動を開始

韓徳氏の生活は、転職や移住、さらには子どもの誕生といった出来事によって大きく変化した。教員、夫、父、そしてカトリック信者として多忙な日々を送る中、2018年に「カトリック函館地区中高生会」（現：カトリック函館地区青年交流会、以下「青年交流会」）の活動を開始した。函館への移住後、ラ・サール会修道士たちが通うカトリック湯川教会（北海道函館市）を拠点に活動を展開し、その取り組みは教会内外の多くの人々を巻き込みながら成長していった。

青年交流会は、2018年に韓徳氏が主に函館市内に滞在するベトナム人技能実習生と出会ったことを契機に誕生した（李賢京2024）。函館で増加するベトナム人のコミュニティに着目し、カトリック信者の若者たちを中心に交流を促進。その過程で、函館ラ・サール高校のミッション部や北海道教育大学函館校の学生・教員が協力し、継続的な支援の輪が広がった。これにより、日本語学習支援や文化交流の場が教会内外に形成され、高齢信者や非信者率の高い学生との交流も活発化していった。結果として、高齢の信者が多い教会全体に新たな活気が生まれた。

2019年以降、月に1度の定例会議が開催され、教育大学生や中高生、ベトナム人リーダー、教会信者スタッフなど約10人が参加。青年企画ミサ（インターナショナルミサ）やイベントの企画、意見交換を行いながら活動の基盤を築き、青年交流会が地域に定着するまでに4年以上を要した。

ところが、2020年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により対面での活動が制限された。しかし、青年交流会は以前からフェイスブックを活用して情報発信や外国籍信者の生活支援を行っており、オンライン基盤を活かして活動を継続した⁽⁸⁾。特に、収入が減少し生活に困窮する技能実習生への迅速な対応が可能となり、教会・地区・教区信者や関係者を対象に食料支援や技能実習生が製作したマスクを販売し寄付金などの支援を呼びかけたところ、地元のフードバンクや農場からの食料支援が得られ、各地からは寄付金も集まり、コロナ禍のなかで困窮する外国籍信者たちを支えることができた。

青年交流会は「One Family One Heart One Goal ひとつの家族 ひとつの心 ひとつの目標」という理念の下、青年企画ミサ（毎月第3週主日）、青年交流会会議、日本語学習（毎週実施）、ベトナム語ミサや交流会、音による祈りコンサート（チャリティーコンサート）、花見、バーベキュー、スキー交流会など多様な活動を通じて多国籍の若者たちが集う場となっている。青年交流会の参加者は、宗教的背景に関係なく、2024年3月現在、約80名以上が参加しており、日本人高校生・大学生20名、ベトナム人30名、フィリピン人29名、インドネシア人1名、ザンビア人、メキシコ人が含まれる。このような活動は、技能実習生にとって「ここはお祈りするだけの場所ではありません。日本人との合同コンサートやバーベキューなどを通して、仕事で疲れた心を治す場所です」⁽⁹⁾となりつつある。青年交流会が技能実習生のエスニック・コミュニティとの接点として認識されているといえよう。

最近では、フィリピンボランティアの帰国報告会とパネル報告が先月までで終わって、

今月はベトナム語のミサがあって、一昨日がチャリントンコンサート（ウクライナ支援）。10月入ると青年ミサがあって、その後たぶん紅葉をみんなで見に行く。徐々になんかいろんな国の人が増えてきてる感じ。ベトナム、フィリピン、インドネシア。インドネシアからの特定技能実習生はカトリック信者で、青年交流会のフェイスブックを見て私が管理者だったので私に直接メールが来て、自分が住んでいる近くでカトリックの青年たちのグループありますか？って聞かれて、ありますよって僕が言って、森町というここから一時間離れている場所から1回来てもらって、そして案内。（中略）青年交流会は高校生が増えました。フィリピンボランティアとかタイボランティア行ってる生徒たちがそのまま青年交流会に入ってくるので、入ってくるようにしているの。いまはちょうど切り替えですけど、もう少しすれば、次のタイボランティア始まると、また青年交流会増えます。だから常時誰かいる感じ。増えてますよ。いい感じで。1年間のルーティン、基盤ができてからは楽。いまは比較的簡単です。（中略）日本語学習も減ってるけど地味にやってる感じ。一人でも二人でも続いているのはすごくいいと思います。今後も地味に活動を続けていく。地味な方が崩れにくいですよ。長続きするし。

韓徳氏のもとには、技能実習生から労働環境（労働時間や賃金、仕事中のケガなど）やセクハラ問題に関する相談も寄せられており、その一部はNHK⁽¹⁰⁾や新聞⁽¹¹⁾でも取り上げられた。例えば、セクハラ被害を受けた技能実習生への支援では、ウイメンズネットや報道機関と連携し、問題解決への糸口を模索した。こうした取り組みを通じて、地域社会全体が課題意識を共有する契機となった。

最近、新聞にも載りましたが、技能実習生から「セクハラを受けているから助けてほしい」と相談されました。セクハラがあって大泉市長の就任1年目終わったときに北海道新聞に載ってます。非常に不愉快で、お金で強制帰国させられた事例になってますけど。あれは去年の11月に結構でかいのが1件。助けてくださいと相談されました。青年交流会メンバーから、友達がセクハラされたので助けてほしいと、1回会ってくださいと連絡がありました。それで会って、その子は日本語全然話せないんですけど、話を聞いていた時に動いた感じかな。解決できてないです。強引にお金払って帰国させちゃって。（中略）相談されたウイメンズネットへ彼女を連れて行って、北海道新聞の記者も呼んでカフェで取材。とりあえず何とかしたい。（セクハラをされていた当時の様子がわかる）その録音したデータをもらったので、それを新聞社に投げて。お金で3万あがるから胸触らせてくれとかね、そういう生々しいの。買い物行くとともに無理やり人がいない場所に連れて、二人になる。そういうのがあって、刑事事件の一步手前の。会社を訴えてもよかったけど、彼女は怖かった。ベトナムの親たちが被害にあう可能性があると思って、借金してお金も返さないといけないうし。たぶんこんなの氷山の一角みたいな事例だと思いますよ。人権ないですよ。

学校関係者や知人からは「狙われるぞと言われました。これをちゃんとした記事にしたらと」言われたが、それでも継続して活動をする。「頼まれれば、そこには向き合いますよ。できることを精一杯、それが自分の手に届かなくても対応できる人たちに声をあげる」という姿勢を貫き、周囲と連携しながら解決に努めている。こうした活動は、先述の平間正子氏やフランシスコ会の修道者たち、さらには釜ヶ崎や南アフリカで出会った「一人の人の声とか、多くの方の声とか」が原点になっていると、韓徳氏は語る。

日雇い労働者たちの「ふるさとの家」という場所があるんですけど、そこでの出会いは結構私は、いま自分でも生徒たちに宗教を教えていますけど、やっぱり私の中の一番大切なところになっています。私の中のベースになってるのは、釜ヶ崎と南アフリカかな。ふたつです。フランシスコ会との関わりがなかで経験できたことは大きい。そこまではただ生きてるだけというか、表面的に生きてた。いま振り返ると釜ヶ崎の出会いと南アフリカが自分の柱になってます。いま授業でも南アフリカと釜ヶ崎の話はずっとしています。生き方とか、どういう人に向かっていくのか、最終的には生き方、どういう向き合い方をするのかは、南アフリカが私の中の中心です。私のアイデンティティね。在日としてのアイデンティティは、南アフリカの時点で解消します。釜ヶ崎では全然見てないので全然。南アフリカの時点で吹っ切れたというか。

さらに、世界のラ・サール会と学校を繋ぐ「ラ・サール会東アジア管区（フィリピン・シンガポール・マレーシア・タイ・ミャンマー・香港・日本）の宣教評議委員の日本代表者」の仕事が増え、年に2回対面での会議があり、タイやフィリピン、シンガポールなどを動き回っている。カトリック系学校の教員や青年交流会のリーダー、これらの経験を通して、「キリスト者としてのアイデンティティのほうが強くなってきた」と語る。

宗教に生きる、メッセンジャーとしての役割はあります。学生を教える役割もあるし。ベトナムの子たちとかフィリピンとかインドネシアとか、やるときは先生としての顔よりは、どちらかというキリスト者として向き合ってるのかな。ま、みんな先生と言ってますけど、どちらかという内面的にはそう。でも、基本的にはずっと同じですよ。フランシスコ会やめようがやめてなかりょうが、基本は同じですよ。キリスト者というのは別に教員になってもならなくても、基本的な路線（宗教に生きる）は変わらないです。もし教員にならなかったとしても、どこかの教会で地味にやってるか、学校があれば学校と教会をつなげるか。なんかやってるんじゃないかと。（中略）いろいろな人との出会いですね、場所だったり。カトリックという基盤、柱の中でたぶん出会ってるのは間違っていないです。カトリックは自分にとっては、なんていうのかな、他の人たちは私がカトリックが家みたいな感じだと言ってますけどね。家、自分の家。カトリック教会なくなったら死んでますんで。家のような感じです。心が落ち着くところです。

これらの場で培った価値観が、韓徳氏のキリスト者としてのアイデンティティを強化し、宗教的活動と教育者としての役割を一体的に遂行する姿勢へと結びついている。「カトリックは自分の家」と語る韓徳氏は、多国籍で多様な背景を持つ人々との交流を通じ、地域社会と信仰の結びつきを深め続けている。

4. 考察

本稿では、韓徳氏の生活史を時系列に追い、その生涯を大きく三つの局面に区分することで考察を進めてきた。すなわち、①日本名（西原徳）で生きてきた時期、②民族名（韓徳）で生き始めた時期、③キリスト教者（ヨハネ・ボスコ）としての信仰を中心に据えて生きてきた時期である。これらの局面は、在日コリアンでありキリスト者であるという、二重のマイノリティとしての経験に彩られている。しかし、在日コリアンとしてのマイノリティ経験と、キリスト者としてのそれは、日本社会における基盤や文脈が異なるため、質的に異なる特徴を持っている。

日本社会における在日コリアンへの視線は、しばしば「不可視の存在」として扱われる一方で、キリスト教者への視線は「未知なる他者」としての性質を帯びる。この認識レベルの隔たりが、両者のマイノリティ性の捉え方に微妙な違いをもたらしている。韓徳氏は「隠していたつもりはないが、自分を明かす場や機会がなかった」と語るように、幼少期において他の在日コリアンと交わる機会に乏しく、民族学級や子供会といった場でのエンパワメントを経験することなく成長した。従来のエスニック共同体における結びつきが弱い環境の中で成長し、「自分のルーツに対する言語化されずに身体化された記憶」（鄭2005）のもと、自身の民族アイデンティティについて「考えないようにしていた」と述懐している。それは日常生活において他者との相互行為の中で少なからずマイノリティとしての葛藤や困難を経験してきた結果でもあると考えられる。だが、生まれながらカトリックという信仰の中で育ち、信仰共同体へ統合され、また同じ信仰をもつ仲間との結びつきを通して、自らのアイデンティティをより強固なものとしてきたと考えられる。それはエスニシティの判断に迫られる日常からの離脱を意味し、何を選択することも自由な開かれたアイデンティティの流動への可能性（上野2005：305）に、信仰というものが働いていることを裏付けているといえよう。宗教とは、超越的存在に自己を定位して生きることであり、人間をこの世界から解放し、自由にしてくれるのである（金子2010）。

そして、大学進学後、実家を離れ大阪で一人暮らしを始めたことを契機に、在日の同級生や教会学校のリーダー、日雇い労働者など、多様な他者との出会いを通じて自らのルーツと向き合うことになった。その結果として、民族名を用いる選択をするに至るが、この決断には日韓ワールドカップや韓流ブームなど、当時の友好的な日韓関係も影響を及ぼしている。民族名で生きる選択は、自身を取り巻く社会的文脈や他者との関係性によっても支えられていたのである。

韓徳氏の生活史を通して明らかになるのは、彼にとってアイデンティティは固定的な実体で

はなく、多様な他者との関係性の中で絶えず流動し、変化し続けるものであるという点である。たとえば、彼がカトリック信仰に生きる過程において、超越的存在に自己を定位することで、民族アイデンティティの葛藤から解放され、キリスト者としての新たな自己を形作ることができた。このことは、アイデンティティの形成において、エスニシティよりも宗教がより大きな役割を果たしていることを示唆している。

とはいえ、「自分は何者か」という根本的な葛藤はなおも続いている。彼がアメリカで韓国系アメリカ人の生徒に出会った際のエピソードにおいて、自らの民族的ルーツに対する自信の欠如や、自己認識の揺らぎが語られている。

教員になってから、2018年に、研修旅行でアメリカのラ・サールの学校に行ったんですが、そこに韓国系アメリカ人（生徒）がいたんですね。親は韓国生まれですが、彼はアメリカで生まれた韓国人。でも韓国語は話せない。話せるのは英語。だけど、自分を韓国人って喜んで話すことを聞いて、すがすがしい感じの家族を見てて良いなあって、羨ましかったです。あまり縛られていない、堂々と言えるところが。自分は堂々と言えなかったというか、そこまで自信はなかった。（中略）日本では選挙権もないし、在日のこともよくわからないし、韓国について聞かれるけど、そんなに知らないし。韓国に行っても多分自分の居場所はないだろうし。だから、違う国行ってるほうが居心地がいいです。フィリピンとかタイのほうがまだ心地いい。

それは、自らを「中途半端な在日韓国人です」と自己紹介をする場面からも垣間見えるが、「ときには国家／民族に足を引っ張られ、ときには頼り、またときには突き放しながら、ローカル／ナショナル／グローバルのあいだ／はざままで、自らについて語るための言葉を紡ぎ出し」（李洪章2024：44）ながら自己定位を模索している様子が窺える。

このような韓徳氏の生活史を通じて、周囲のマジョリティや立場の異なるマイノリティ、あるいは宗教との出会いによる相互行為のなかで、アイデンティティが他者との関係性の中で構築され続ける流動的な過程であることが明らかになる。固定的な実体ではなく、社会的文脈や関係性によって常に再構築されるアイデンティティは、新たな社会変革のエージェンシーを生む可能性を秘めている。千田の指摘する「ポジショナリティ」の概念は、こうしたアイデンティティの流動性を理解するための重要な視点を提供する。ポジショナリティは文脈依存的で多元的な立場性を含み、「他者との関係性の中で自己がどのように立ち現れるのか」（千田2005：270）を問い直す枠組みとして機能する。

最後に、在日コリアンとして、またキリスト者として生きるということが持つ社会的意味を再考したい。韓徳氏の生活史は、日本社会におけるマイノリティの重層的な経験を浮き彫りにし、それがいかにして新たなアイデンティティの構築や自己定位へと繋がるのかを示している。この過程を読み解くことで、マイノリティの存在が問い直すべき社会構造や制度、さらには新たな公共性の可能性を考察するためのヒントを得ることができるだろう。

アイデンティティは、構築され続ける過程である（千田2005：285）。それは確固たる実体で

はなく、「今のわたし」とは、記録され続ける録画の一瞬を切り取ったスナップショットのようなものにすぎない。マイノリティであれ、マジョリティであれ、固定的なアイデンティティなど、存在しないのである。「〈いま・ここ〉でマイノリティとマジョリティの共同性を構築しつつ、〈いま・ここ〉では済まされない、構造や制度レベルへの働きかけ（社会変革）に向けて、ポジショナリティ（立場性）を踏まえた協働と共同性」（山本 2022：256）が求められる。

おわりに

本稿の執筆に際しては、2019年以降幾度となく函館を訪れ、韓徳氏および青年交流会の活動に関するフィールドワークを積み重ねてきた。しかし、著者自身の不徳も重なり、完成に至るまでに長い時間を要したことをここに記しておきたい。多忙を理由に挙げることは可能であるが、実際には、韓徳氏の話に触れるたびに湧き上がった感動や興奮を、文章に昇華する過程でうまく表現できないもどかしさに悩まされ、さらには「自分がこの内容を記す資格があるのだろうか」という葛藤を抱えることも少なくなかった。

韓徳氏の人生を多面的に捉えるべく、筆者は韓徳氏本人のみならず、彼に影響を与えた平岡正子氏や上原功宏神父、そして家族や青年交流会のメンバーにも聞き取り調査を行った。しかしながら、その成果を本稿に十分反映できなかった点は、自身の力不足を痛感させられるところである。一人の人生を描き出す難しさと、その作業がもつ重責を改めて認識した次第である。

また、先行研究の十分なレビューを行う時間を確保できなかった点についても反省が残る。しかし、日本社会に生きる在日コリアンのキリスト者個人に焦点を当てた研究が乏しい現状を鑑み、本稿を通じて、韓徳氏の生活史を軸に在日コリアンの生き様と信仰の意義をリアルに伝えたいという思いが、筆者をこの記録の作業へと駆り立てた。そこには、おそらく故・李正雨氏の信仰の歩みを生前に記録として残すことができなかつた無念も影響しているだろう。

筆者は、勤務先の大学で「共生」をテーマとした授業を担当する中で、日本に暮らす外国籍住民の日常を共生の観点から学生に理解してもらおうべく、在日コリアン当事者の体験を描いたドキュメンタリー映画を紹介している。たとえば、川崎市桜本地区で暮らす日コリアンの女性たちを描いたドキュメンタリー映画『アランラブソディ〜海を超えたハルモニたち〜』（2024年公開）は、戦争や植民地支配の歴史に翻弄されながらも日本社会で力強く生き抜いた在日女性たちの激動の半生と、晩年に訪れたささやかな幸福の日常を「語り」を通じて浮き彫りにし、「生きた戦後史」として表現している。

韓徳氏が川崎市桜本地区の在日高齢者たちとともに「自分のルーツを探す旅」をした際、在日コミュニティとの接点が乏しい環境で育った彼は、在日高齢者たちとどのように触れ合い、それを通じて何を考えたのだろうか。筆者は授業で映画を紹介しながら、そのような問いを巡らせる中で、在日コリアンの「生きた日常」を理解すると同時に、当事者の語りを記録し、その記憶を後世に継承することの重要性について深く考える機会を得た。

筆者もまた微力ながら、この記録作業を通じて、在日コリアン当事者たちが〈いま・ここ〉

で生きる姿を後世に伝える一助となることを願っている。その語りとともに歴史を未来へと繋ぎ、「共生」という理念を具体的な形で示す試みに寄与したいと切に思う。

註

- (1) 本稿では韓徳氏の生活史を検討するにあたり、「カトリック信者」と「キリスト者」を区別して用いることとする。キリスト者とは、キリストに従う信仰者を指す。聖書『使徒言行録』11章26節（新共同訳）には、「弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」と記されており、この呼称はシリアのアンティオキアで、イエスの教えに従う人々を指して用いられたとされる。本稿で取り上げる韓徳氏は、幼少期にカトリック教会で幼児洗礼を受けてカトリック信者となった。その後、修道会に入会し宗教者を目指したものの、最終的には退会している。その後は、カトリック信仰を基盤に自身のアイデンティティを確立し、外国人支援活動に精力的に取り組む人生を歩んでいる。このような経緯から、韓徳氏はある時期を境に「カトリック信者」から「キリスト者」へと移行したと考えられる。
- (2) 在日コリアンとは、「韓国籍、朝鮮籍、日本籍等を含めた、戦前から日本に住んでいる朝鮮半島出身者とその子孫」を指すこととする。
- (3) 英知大学は、カトリック大阪大司教区が1963年に創設したミッションスクールで、日本で唯一のカトリック教区立大学であり、近畿圏では唯一の男女共学のカトリック大学であった。2008年度から名称を大阪聖トマス大学と改めたが、2015年閉学、廃止が認可された。
- (4) 筆者は、韓徳氏親子2世代にわたる信仰の継承過程およびその日常生活における意義を明らかにするため、2023年6月24日に韓徳氏の母親である朴氏の自宅においてインタビュー調査を実施した。本稿では、紙幅の制約により信仰の継承に関する詳細な分析には言及できなかったが、このテーマについては改めて別稿にて論じる予定である。
- (5) 平間正子氏の人生の軌跡と在日外国人信者への支援活動に関しては、斉藤弘子『韓国系日本人—マリア・オンマの軌跡を追って（国境を越えた女たち）』（彩流社、1994年）に詳細が掲載されている。筆者は、2019年6月16日に平間氏の自宅にてインタビュー調査を実施、彼女が通っている鹿島田教会の主日ミサにも参加した（同年同月）。
- (6) 1982年から鹿島田教会の主任司祭となり、青年労働者の養成に携わっていたカトリック横浜教区の司祭である。平間正子氏と一緒に在日外国人問題など長年取り組んだ。筆者は、2019年7月12日にインタビュー調査を実施した。
- (7) 1989年10月、日系企業の韓国からの撤退が社会問題化する中、たった一枚のファックスより「全員解雇」通知を受けた韓国スミダ労組は、代表団の4名の女性が来日し、1990年6月まで半年以上にわたる長期の闘いが続けられた。
- (8) 青年交流会フェイスブックの登録メンバー数は、2024年11月現在408人である。
- (9) 外国人実習生に第3の居場所を 函館の教会「疲れた心治す場所」『北海道新聞』2023年9月19日デジタル版 <https://www.hokkaido-np.co.jp/article/909736/>（2024年11月25日最終アクセス）

- (10) テレビ番組「NHK 函館 おはよう日本」(2019年10月10日放送)
 (11) 「函館の現在地 大泉市政1年 ①働き手はどこに 外国人頼み、足りぬ支援」『函館新聞』
 2024年4月23日朝刊15面

【付記】 本研究はJSPS 科研費 JP18K00084の助成を受けたものである。

参考文献・資料

- 飯田剛史 (2002) 『在日コリアンの宗教と祭り——民族と宗教の社会学』 世界思想社。
 李仁子 (1996) 「異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性——在日韓国・朝鮮人の墓165白山人類学23号2020年3月をめぐって」『民族学研究』 61 (3)、393-422。
 李正雨 (2014) 『ムクゲの頬づえ』 (非売品)。
 李賢京 (2023) 「コロナ禍における移動と宗教——社会的空間の再構成と「動く」信者に注目して」川又俊則・郭育仁『次世代創造に挑む宗教青年』 ナカニシヤ出版。
 井上恵子 (2016) 「経験のない「民族」を生きるということ——在日コリアン青年の語りから読み解くエスニシティ」『日本オーラル・ヒストリー研究』 12号、191-205。
 李賢京 (2024) 「次世代へ、青年会のつながりを創り出す——コロナ禍のフィールドワークから」『福音宣教』 5月号、38-44。
 上野千鶴子編 (2005) 『脱アイデンティティ』 勁草書房。
 萩翔一 (2024) 「在日コリアンと宗教をめぐる研究動向の整理」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』 41号、78-86。
 小熊英二・姜尚中編 (2008) 『在日一世の記憶』 集英社。
 小熊英二・高賛侑・高秀美編 (2016) 『在日二世の記憶』 集英社。
 金子昭 (2010) 「宗教者と信仰者についての一考察 (続き)」今日の時代における宗教批判の克服学 (14)、Glocal Tenri、11-2 <https://www.tenri-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/GT122-5.pdf> (2024年11月25日最終アクセス)
 川端浩平 (2013) 『ジモトを歩く 身近な世界のエスノグラフィ』 御茶の水書房。
 金泰泳 (1999) 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて 在日朝鮮人のエスニシティ』 世界思想社。
 金兌恩 (2008) 「在日韓国・朝鮮人児童のアイデンティティとポジショナリティ——京都市立小学校における「民族学級」を事例に」『京都社会学年報:KJS』 16、1-20。
 斉藤弘子 (1994) 『韓国系日本人——マリア・オンマの軌跡を追って』 彩流社。
 鈴木晋怜 (1990) 「アイデンティティ形成に占める信仰の位置」『智山学報』 39、147-160。
 鈴木隆男 (2015) 「アイデンティティと宗教」『和顔愛語』 43、1-4。
 千田有紀 (2005) 「アイデンティティとポジショナリティ——一九九〇年代の「女」の問題の複合性をめぐって」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』 勁草書房、267-287。
 薛桃子 (2024) 「ある在日朝鮮人二世のアイデンティティ——「韓国」に関するナラティブの分析から」『社会言語科学』 26巻2号、51-6。

李賢京

鄭暎惠（2003）『〈民が世〉 斉唱 アイデンティティ・国家・ジェンダー』岩波書店。

鄭暎惠（2005）「言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、199-240。

宮下良子（2012）「在日コリアン寺院の新たなアクション——その先へ」宗教社会学の会編『聖地再訪 生駒の神々——変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』創元社、187-214。

宮下良子（2020）「被差別部落に混住する在日コリアンのエスニシティ——大阪府堺市の事例から」『白山人類学』23、141-168。

李洪章（2016）『在日朝鮮人という民族経験——個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院。

李洪章（2024）「社会学は在日朝鮮人にとっての国家／民族をどのように捉えるのか」『フォーラム現代社会学』23、33-46。